



投資と寄付を結ぶ「心」

対談： 日本フィランソロピー協会理事長、高橋 陽子氏、
岡本 和久
レポーター： 赤堀 薫里

岡本：インベストラ이프のインタビューは、最近、投資の話が多かったので、今回はもう少し範囲を広げて、寄付という側面からお金の有用性について、つまり、投資をするというのはどういうことか、寄付をするというのはどういうことかを考えていきたいと思っています。
私が1971年に新入社員として証券会社に入った時に、当時の会長が入社式で「君たちは良い会社に入った。これからいよいよ貯蓄から投資の時代が来る」とおっしゃったので、そうか、これからは投資の時代なんだと思ったけれど、今も同じことが言われているでしょう。

高橋：そうですね。日本人に投資は馴染まないのでしょうか。

岡本：40数年経って変わっていないんですから、驚くべきことですね。これは「安全なものではなくて、危ないものをやりましょう」という言い方がそぐわないのかなと思う部分もあるんですね。だけど、ここに心という要素を加えてみると見え方が変わってくる。つまり、「寄付から投資へ」という考え方もあるのではないかと考えています。要するに、世の中の困っている人を助けてあげる。今、すぐにお金を必要としないお金がある。一方で今お金を必要としている人がいる。その人にお金を使わせてあげて、世の中の役に立つような良いことをしてもらおう。良い社会づくりのために、自分のお金を使ってもらおう。投資というものをそのようにとらえてみるとずいぶん違った世界が見えてきます。それでその人がみんなから喜ばれることをして、感謝のしるしであるお金が集まってきたら、そのお金の一部がずっと将来に自分のところに増えて戻ってくる。同じ投資という行動でも、そういう考えに基づいたアプローチの方が日本人的には受け入れられやすいのではないかなと思います。





長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋:確かにそうかも知れませんね。貯蓄だと自分のためfけれど、投資にはリスクがあつて、減ったら怖いという感じはある。しかし、そこに良い世の中をつくるという要素を含めるとずいぶん違ったものに見える。つまり、投資には寄付的な要素もあるということですね。

岡本:そうなんです。寄付は最初からお金を出し、それが戻ってくることは期待していない。でも、投資で世の中のためになることにお金を使ってもらい、その上、増えて戻ってくる可能性があるなんていうことになったらすごく良いことのような気がしますよね。

高橋:ピギーちゃんの貯金箱にも寄付の部分がありますよね。

岡本:はい。もちろん貯金は必要だけど、選択肢が貯蓄だけというのはないですよ。寄付も、投資もある。

それともうひとつ、投資のリターンというものをどういうものに求めるのかということがあります。投資でお金を出したんだから金銭的なリターンだけを求めるのか、あるいは金銭的な投資であっても、この会社を応援しているという満足感というリターンがあると考えるとか、または寄付のようにお金のリターンは無いけれど、少しは自分もみんなに喜ばれることをしているんだという喜びをリターンと捉えるのもあるかと思います。いわゆる「利他のリターン」ですけど、そういう一面もあるかと思います。そういった面で、お金全般に対して光を当ててみると結構、見え方が違ってくるんじゃないかなと思っています。

高橋さんは、最近、人々の寄付に対する意識が変わってきているとか、そういうことは感じられますか？

高橋:数字を見ると個人は増えてきています。個人と法人で半々くらいになっています。

岡本:そうなんですか。以前はどのくらいの割合だったんですか。

高橋:個人は4分の1くらいだったと思います。

岡本:それはかなり増えましたね。

高橋:はい。そうです。若い人達中心にクラウドファンディングという形が広がってきています。それから、私の周りでも、寄付とかに関係ないと思っていたような人が、実はアジア地域の子供の里親になっているとか、あまり表立っては分からないけど、そういう人も増えてきているのかなという感じはあります。

岡本:全体的に少し豊かになってきているからなんでしょうか。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋: そうかも知れないですね。あとは、少子化と非婚化があるので、子供や孫がいない方が、そういう事をやられていらっしゃるのかも知れませんね。ただこれはあくまで推測です。自分の周りにそういう方がいらしたので。

岡本: 仮に子供が1人だったとして、その一人っ子が結婚しないとなると次の世代は無いんですよね。そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんになった時には、今度は長寿化という問題があるから、この一人っ子に全部お金を使うのかとか、相続税の事なんかを考えると、別の使い方を考えてみるというのはありますよね。

高橋: 今は遺贈に関心が増え始めています。NPO側も遺贈の受け取りに積極的です。先ほど申しましたように、遺産を残す子どもがいない人や独身の方も増えてきたり、遺族が揉めるくらいならば寄付をしておこう、という考えがあるのかも知れませんね。

岡本: なるほど、そういうものもモチベーションの一部となっているんですね。それと一方で、東北や熊本の震災の時もそうでしたけど、なにか居ても立ってもいられないという感情になって、助けたいという気持ち芽生えている人達が出てきているのもあるような気がしますよね。

高橋: それは確かにあるでしょうね。全体的に豊かになっている中で、困っている人が圧倒的に多いという情報なども入ってくるようになりましたから。ただ、豊かな人達だから寄付に積極的であるという実感は、あまり感じないんですけどね。

岡本: 寄付をしているか、していないかと、豊かさってそんなに大きな相関がないのかも知れないですね。

高橋: はい。相関は強くないと思います。私の希望を言えば、富裕層の方にはもう少し寄付をしていただきたいなと思っています。

岡本: 金額的にはそうなりますよね。富裕層が資産の1割を寄付する場合と、ミドル層の人達が資産の1割を寄付するのでは、金銭的な負担感は全然違うでしょうね。

高橋: そうですね。そう思って機関誌でも富裕層ビジネスに関わっておられる増淵さんを書いていただいているんですけど、そういう富裕層の方がなかなか動いてくれないのが現状ですね。

岡本: そういう方は、何に使っているんでしょうね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋:もちろん投資などもされているんでしょうけど、買うものの単価も大きいんだと思います。この間、宝石のトップセールスの方と話す機会があったんですけど、1,000万や2,000万の買い物を日常的にされるそうなんです。そういう単価のものを買っているんだとすると、収入はあっても豊かさの実感というのは、意外にないのかも知れません。

岡本:結局、通常的生活の上で必要とする金額というのはそれほど高額ではない。もちろんそこを上回る人や下回る人がいるんですけど。

高橋:収入と幸福度の境界は75,000ドルという話を聞いたことがあります。収入が75,000ドルを越えると、幸福を感じる度合いとの相関が低くなるという調査結果があるみたいですよ。

岡本:日本で言えば、例えば年収1,000万円の人はいずれの生活をしていると思いますけど、だけど年収1億円の人が1億円の生活をしているかと言われたら、そうではないですよ。その差の9,000万円は多分、ある意味、不要不急のお金なんですよ。

高橋:はい。そうでしょうね。ただ、生活レベルが違うとは思いますが。高いワインを飲んだり、住まいも都心の地価が高いところだったり、車もより上等なものだったりするんだと思います。そうだとすれば、余裕を持つ、という気持ちにはならないようです。欲望がどんどん増大することにつながるとしたら、意外と気分的には落ち着かないでしょうね。

岡本:なるほど。確かに収入が増えるほど高額の支出をしていたら余裕はなくなってしまう。

高橋:あとは子供の教育ですね。子供の教育にはものすごくお金を掛けていますね。掛けないといけないんじゃないかという強迫観念みたいなものがすごいですよね。でも、結果的にどうなるかというあまり変わらない、というかむしろあまり良いことにならないんじゃないかという風にも思いますね。

岡本:お金の問題と教育の問題が絡んでくるというのは、簡単に言うと塾に行けるかどうかということになりますか。

高橋:そうですね。でも今は塾だけではないんですね。昔は野球とかサッカーは、道路や公園とか放課後の校庭でもできたんですけど、今はそれができない状況なんですよ。そうするとどうしても野球教室とかサッカー教室とか水泳教室に行くってことになって、つまりお金が掛かってくるんですよ。

岡本:公園でもできないんですか。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋:ダメなんです。一部できるところがあるかも知れませんが、概ねダメですね。学校が一番安全なんですけどそれもできなくなっています。なので、私たちの会員企業さんの中には、放課後の学校に人材を派遣したり、部活の指導を請け負っている企業も出てきました。

岡本:そうなんですか。

高橋:はい。今は先生が臆病になっているようです。何か事故でもあったときに責任を持ってないということみたいです。ただ、まだこれはごく一部だけで一般的ではありませんけれどね。それで、普通は塾と同じようにスポーツ教室に行くためにお金を払う。そうすると行ける子と行けない子が出てきちゃうというのはありますね。

岡本:行けない子はどうなりますか？

高橋:ブラブラしたり、家に引きこもったり、いろいろだと思います。お父さん、お母さんが一生懸命働いている“健全な貧しさ”であれば、鍵っ子で家で留守番をしたり、友達と遊んでいるんでしょうけれど。行ける子は塾に行ったり、スポーツ教室で体を動かしているの、その辺でも格差が生まれてしまうのは可哀想だなと思いますよ。あと、高校になると、貧しい場合は授業料は無料になるんですが、交通費は出ないんですよね。そうすると、例えば定期券の5,000円が払えなくて退学してしまうこともあるということを知りました。なので、そういう谷間のところをサポートしてあげる必要がありますよね。それと、そういう子供は小学校の時から勉強をきちんとしていないので、九九ができないケースも多いのです。九九が分からないまま中学校を卒業してしまうんですね。そんな状況の子供だと正社員では働けない。たこ焼き屋さんでアルバイトしていた子がいました。ある時、たこ焼き30個を頼まれたんだけど、九九ができないから順番に数えながら入れていくんですよ。そうやっていると、まどろっこしいからお店の人にも怒られてクビになる。それは大変なんだけど、逆に言えば誰かが九九を教えてあげれば、少しでも可能性が広がるんですよ。

岡本:九九がわからないというのはショッキングです。

高橋:学校ではもちろん教えてはいるんです。だけど、理解の遅い子に丁寧に教えようとする、他の子供達、あるいは保護者から不満が出るのでなかなかできないみたいです。これは九九だけでなく漢字もです。それ以前に生活習慣に関しても、想像を超えることがあるようです。

この間、京都で学習支援をしている人の話を聞いたんですけど、そこでは、来たらまずお風呂に入るんですって。なぜかという、まず体に傷が無いかを確認するというのと、生活習慣を見るためというのもあるみたいです。頭を洗いましょうという、髪をぬらさないで、いきなりシャンプーを頭に直接かける子もいるみたいなんです。私たちは誰かに教えられたというわ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

けでなく、親がやっているのを見て覚えていくんですけど、その子達はそういう経験がまったくないので、そういうことをするんですよね。だから、それを違うよと教えるとか、体を洗ってキレイになると気持ちがいいというのを覚えてもらうとかをやるみたいなんですね。ご飯を食べるときも先にテーブルをキレイに片付けてから食べさせる。そうすると片付けをしてから食事をすると気持ちがいいなと覚える。

ある時、担当の先生が子供の家に招待されたんですって。家は全体的に散らかっているんだけど、その子は自分のスペースをちゃんとキレイにしている、それを見てほしかったんですね。その子はキレイにすると気持ちが良いことが分かったみたいで、つまり、親が教えてくれなくても、ロールモデルがいれば子供は覚えていくんですよね。

岡本: 外国から日本に来た人でも同じような話がありますね。最初は大声で話すとかゴミを散らかすとかやっているんだけど、何度か日本に来るうちに、段々と行儀作法を覚えるのと同じですよ。やっぱり人に迷惑を掛けないようにするとか、人のために何かするとか、そういう事を自分で体験すると段々とそれが身に付いていく。それと同じような面がありますね。

高橋: そうですね。やっぱり教えなければ分からない。私たちは教えて貰っていないと思っているけど、教えて貰っているんですよね。

岡本: 1970年代だったと思いますが、飛行機に乗った時の事ですけど、当時は農協関連のツアーが盛んだった頃で、日本人の団体が私の後ろの方でガヤガヤ騒いでいるんですよね。それで、飛行機が離陸して水平飛行になった途端に、その人達がみんなズボンを脱ぎ出すんですよね。みんなステテコになってワイワイガヤガヤやっていることがあったんですけどね。確かに楽は楽なんでしょうけど…。今はそんな人いないですけど、日本もそんな時代もあったんですよ。まあ、段々とまわりの人の振りを見て学んでいくんですよ。

高橋: そうですね。最初からは分からないですからね。だから、貧困と言ったときの問題は、お金が無い貧しさと体験の貧しさが繋がってしまいますよね。

岡本: なるほどね。体験というのは、全てとは言わないけれど、本来は家庭の果たす役割が大きいということになりますね。そういう子供の親はどういう状況なんですか？

高橋: よく貧困は連鎖すると言いますから、親もそういう家庭だったりとか。それと一概には言えませんが、虐待の経験があったりすると思います。で、それを子供にもしてしまう。または、親御さんが精神障害だったりアルコール依存症だったりするケースもありますね。少年院に入ったり、非行をしてしまったり、一旦、道を外れてしまうと、受け入れてくれる所がないから、どんどん落ちていってしまうみたいです。やはり、大事にされた経験のない人は、子どもの愛し方などもわからないようですね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ですけど、大阪のあるNPOの方から聞いた話で、同じような境遇の女の子が2人いて、ひとりには落ちていっちゃった。だけどもうひとは、ちゃんと結婚してお子さんを産んで育てているってことを聞きました。その人が頑張れたのは、父親違いのお姉さんが子供を産んで育てているのを見て、自分にもできるって思ったからなんですって。

岡本:なるほど。キーワードは希望ですね。

高橋:はい。本当にそうなんです。希望なんです。子供達に希望をどうやって持たせてあげるか。希望を持つためには、身近にイメージできるロールモデルがあるというのが大事なんですよね。

岡本:今の話を伺っていると、親の生活態度というか基本的な考えに問題があるように感じますね。それがその親たちの責任かどうかは別ですけど。これって、私たち世代の子育て方が悪かったのかな。

私たちのひとつ前の世代は、戦後の日本が復興していく立役者としてやっていて、私たちはある程度土台ができていて、それなりに良くなったところで社会に出て、今思うと安定した比較的気楽な時代だったんですよね。高度経済成長と言われていましたし。でもその次の世代は、学生時代にバブルに浮かれた大人達を見ていて、社会に出た途端にバブルが崩壊したとかという、ある意味、屈折したものがあるのかも知れませんね。

高橋:私の親の世代は、敗戦で価値観がガラッと変わってしまって、それまでの国家主義が無くなった時に、人間としての道徳・倫理観みたいなものも一緒に壊れてしまったように思います。寺島実郎さんが、団塊の世代の特徴は経済偏重主義と私生活主義とおっしゃっていました。とにかく豊かになりたい、という思いがエネルギーになっていった時代でもありましたが、それが、自分さえよければ、ということにもつながっていったのかもしれない。また、個人主義と言っているけれど、本来、個人主義は他者との関係の中で、流されることなく自分でしっかり考え行動する、ということだと思いますが、私生活つまり自分達の身近な人達との生活が全てで、パブリックという概念がなくなってしまった。その始まりが団塊世代で、それが今につながっているのだと思います。よく電車の中で化粧をしたり床に座り込んだりする人達には、パブリックの概念がないんだと思います。全ての空間も時間もプライベートで、その分、友達との関係は密接でないと不安になるんだと思います。だから、友人や家族以外の、社会の一員という意識はないので、寄付、という発想も出にくいのかも知れませんね。

岡本:なにか個人主義的なものが良いものなんだという意識がありますよね。しきたりとか、しがらみとか、そういったものに囚われないという考えなんだと思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋:そこからの解放というのはありましたよね。ただ、本来、人間の暮らしにはパブリックとプライベートというのはあるんだけど、そこからパブリックが抜けてしまった感じというか。

岡本:日本にもパブリックという何か共通の道德観というような意識の土台があったんだけど、それが軍国主義的なものに支配されてしまった。それで、戦後、軍国主義と一緒に道德観念も全部捨てちゃって、上にあった個人主義的なものだけ拡大されて残ったという感じでしょうかね。

私は18歳からアメリカに行って、そこで驚いたのが、みんな非常に個人主義的だということでした。みんなそれぞれ思い通りのことを自由にしている。それを凄く感じましたね。

高橋:他人のことは構わない感じなんですか？

岡本:いいえ。そこに共通の何かがあるんですよね。アメリカの場合、それが何かと言うと民主主義とか自由とかそういう共通の価値観や、宗教的なものもあったのかも知れないけど、何かの精神的な土台になるものがあって、そこからそれぞれの個人主義的なものが出てきている感じがありました。

そう考えると日本の場合は、相手のことを思いやるみたいな「和の精神」とか、そういったものが共通項としてみんなが持っている、そういう教育が必要なんじゃないかなと思いますね。

高橋:「分に安んで足るを知る」という日本人が持っていたものと、「無常」の精神でしょうか。今は、シェアリングエコノミーという概念も広がり、若者も所有欲があまりなくなっているようで、物も時間もシェアして、沢山働かない分、給料が少なくても良いという人達の動き、それと元々日本列島がもっている地震や台風の多い自然の風土の中で生きていかなければならず、そういったものが繋がっていった緩かな共同体みたいなものが芽として出ているようにも感じています。

岡本:そういった土台を培っていく有効な手段が寄付みたいなことかも知れないですね。自分のことだけでなくお互いのことを考える。自分の生活は成り立っているから、上澄み部分は人のために使おうという考えで、それだって立派なシェアリングエコノミーですよ。

高橋:そうですね。そうやって分け合うやり方は、日本人には割りと合う気はしますよね。

岡本:本来はそうですね。だけど、例えば今の教育制度はその部分にあまり重きが置かれていないですね。個人主義というか、個として勝ち抜いていくことを重要視していますね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

高橋: 20世紀型の競争に勝ち抜くことで幸せを得る、という価値観が、機能しなくなり始めている昨今でも、まだ新たな価値観を確立できずに不安ばかりが募って、結局、過去に捉われているのかもしれない。

この間、慶応大学で幸福学を研究されている前野教授に、子供の貧困の研修の講師をしていただいたんですけど、「幸福には、地位財(学歴とか収入)と非地位財(友人や信頼や感謝の気持ち)が、財としてあるけれど、地位財での幸せは長続きしない。逆に非地位財は長続きする」という話を聞きました。つまり、非地位財は収入とかに関係なく幸せになれるので、ボランティアをする人も、サポートしてもらう子供達も、「幸せになりたい」という気持ちと「幸せだな」って思う気持ちは実は同じなんだなと思いました。

あと、前野先生の、「幸せの4つの因子」という話で、1つは「成長とか向上心」。2つ目は「繋がりと感謝」。3つ目は「楽天的な考え」。4つ目は「マイペース」なんですって。これで、地位財・非地位財というのも考え合わせると、意外と「繋がりと感謝」というのが幸せになるポイントかなと思いました。

それで、今度は自分が歳を取ったときに、体は着実に衰えるし、できないことも増えてくる。それを実感するし、残された時間も短いとか、自分に関心がいくとネガティブな事が多くなるんですね。でも、例えば利他についてや、寄付のことを考えると、そのリターンが子供達の成長だったり喜びであったりするんですね。だからそういうことをやっている、すごく幸せでポジティブな事に出会わせて貰える。利他という考えは、幸せになるための大事な因子なんではないかと思えますね。

岡本: 地位財というのは、意味が薄いものかも知れないですよ。例えば、どこかの会社の社長をやっていた人が全ての職責を離れたら、自分の存在意義が感じられなくなってしまいかも知れませんね。だから、逆に言えばあるレベルや年齢になって能力的な限界を感じたら、その地位から離れた方が良いんだと思いますよ。でも、その決断をできない人はかなり多いですよ。

高橋: ジャック・ニコルソンが主演の「アバウト・シュミット」という映画があるんですけど、退職した男性が一ヶ月くらいして会社で顔を会わすんですけど、みんなどこか冷ややかな感じなんですね。奥さんとも離婚をするし、娘は自分の気に入らない男と結婚をする。本当に孤独で寂しくなっている時に、アフリカから手紙が届くんですね。差出人は自分が寄付していた子供で、中にはお礼の手紙と、その子と自分が手を繋いでいる絵が入っていて、それを見て号泣するんですね。これは寄付推奨の映画だと勝手に思っているのですが(笑)、そこで描かれているのは、繋がりになんですよ。自分が手を差しのべたことで繋がりができて…という事ですよ。

岡本: 自分にとっては些細な事でも、相手にとっては物凄く大事な事ってありますよね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

非常に裕福な人にとっての一万円と貧困な人にとっての一万円って、全然価値が違いますからね。逆に言えば、その一万円札が向こうに移ることで生きる事になるので、一万円札も喜ぶますよね。

高橋:それは面白い考え方ですね。お金の気持ちまで考えたこと無かったです(笑)。

岡本:私は以前から「幸せの六角形～六つの富」(<http://www.i-owa.com/diary/2013/01/89.html>)という話をしています。実は私自身ちょっと悩んでいることがあります。高橋さんのご意見をお聞きしたいのです。六つの富の中で、いま一番悩んでいるのは「ファミリー(家族)」なんです。学校で話をした時に、ファミリーがない子供もいるんですね。片親であったり、両親がいなくて施設に入っている子供もいます。虐待を受けている場合など、色々な子供達がいる中で、一概に「ファミリーが幸せの重要な要素なんだよ」と言ったとき、その子にとってどういう風に聞こえるのかなと思いました。これが、いま私の気持ちの中で何か解けない問題になっています。

高橋:そうですね。こども食堂をやってらっしゃる方が、夜に子供達を車で家まで送って行くときに、最初は甘えたりしているんだけど、自分の家に近づくとつれ、子供が緊張していくのが分かるんですって。家の中に入るまで見送っているんだけど、甘えていた時とは顔つきがまるっきり違うと言っていました。本来、ファミリーは癒しの場であり、自分を受け入れてもらえる場なんですけど、緊張の場になっているということですよ。



岡本:なるほど。そうすると家族って何なんだろうって思いますよね。ある人は、ペットだって家族だということを言っていました。それは確かにそういう部分はありますよね。相撲部屋の女将さんと若い力士達だって、ひとつの家族かも知れませんよね。そういう風に考え方を広げていくと、家族って何なんだろうって考えてしまいます。

高橋:血縁だけが家族ではないんですよ。日本人は割りと血縁を大事にしていたけど、今はもうちょっと広がってきた感じがありますね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本:そうですね。物理的な面や精神的な面でも身近であるということがファミリーであるということになってきているのかも知れませんね。

高橋:そう考えると、広い意味ではフィランソロピーとファミリーって繋がってくるのかも知れないですね。

岡本:確かに、家族の中でのやりとりなんて、フィランソロピーですね。

高橋:本来、家族の愛は「無償の愛」ですからね。でもそれが、最近はそのような無くて、親も、条件付きでの愛になっている感じはありますね。子どもにとって家庭は、本来ありのままの自分を無条件で受け入れてもらえる、という安心感を持つ場所です。その安心感がベースにあれば、その後、いろんな困難があってもしっかりした土台があるので頑張れると言われていています。その土台が育っていないと、その後、困難にぶつかると折れてしまう可能性が高いようです。家庭力が弱まっているとしたら、社会が、家庭力を補完する役割が必要ですね。ボランティアとか寄付っていうのも、希望と繋がりを実感するための土台作りの意味があるように思います。特に子供たちに関しては、親に外れたら人生にも外れる、ということにならないよう、周囲の大人が子どもたちに希望と繋がり可能性をしっかりと伝えていきたいと思っています。

岡本:愛によってお互いに結ばれている状態と、相手の希望や幸せを願う無償の愛の部分と、そこはちょっと違う形だということですね。フレンドとファミリーの大きな違いかな。

高橋:無償の愛であれば、自分に何かを返してくれなくても、その子が元気になってくれたり、その人が豊かで幸せになったり、また、自立してより意味のある人生を送る、ということがリターンになるわけですね。もちろん、相手にとって意味あるサポートでなければいけないですが、感謝が足りない、などと思わないで無償の愛でやっている結構、幸せでいられるかなとも思います。結果的に、それがきっかけで新たな繋がりもできるかもしれませんし。歳を取れば取るほど、利他行動は自分にとって幸せになる大事な因子になるのかも知れませんね。それをロールモデルとして幸せそうだなと思ってくれて、自分の子供や若い人が真似をしてくれたら良いですね。

岡本:私は世の中の人々のストレスを少しでも緩和できないかと思って、私が長年、続けている瞑想を学ぶための奨学金制度を作って、2月に募集をして4月から1回目の受講者が通い始めました。授業料の半分を出してあげて、それは返さなくてもいいものでやっています。

高橋:それは子供が対象ですか？



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本:大人でも子供でもいいのです。家族で学ぶ人もいます。それで、一年経ったところで感想文を書いてもらうというお願いはしていますが、それ以外は特に何も求めていません。

高橋:それはどこでやっているんですか？

岡本:私のやっている瞑想の団体です。希望者は、結構たくさんいましたよ。

高橋:困っている人達が対象ですか？

岡本:はい。それと必要性が高いということも選定の重要ですね。募集に際しては、作文を書いてもらって、それを読んで決めています。

高橋:必要性が高いとは、どんな状況のことですか？

岡本:幼い時から虐待を受けていて、いま親になった人とか、あるいは病気だとか、外国籍の人で日本で結婚をしたけど上手くいっていないとか、いろいろなケースがあります。瞑想をやりたけれど、生活費はこれ以上削れないからという感じですね。

高橋:なるほど。そういう活動もやられているんですね。

岡本:はい。やっていると言え、あとは明治大学の株価指数研究所ですね。

高橋:あれも良いですね。昔の株のデータが全然無いという話を聞きました。

岡本:そうです。無いんですよ。明治時代、1878年から株式取引所があって取引が行われていたのに、データが揃っていないんですね。戦後の分しか残っていないんです。戦前のことは忘れた。忘れたってことでしょうか(笑)。

高橋:それを色々掘り起こしているんですね。

岡本:はい。明治大学の図書館や、国会図書館で調べたりしています。明治大学の学生達が一生懸命にアルバイトでやってくれていて、2020年を目標にして頑張っていますが、これは私なりの証券市場に対する恩返しだと思っています。

高橋:やっぱりご自分の人生のキャリアだとか瞑想もそうですし、そういったいろいろなところへの恩返しとして寄付のような事をやっていらっしゃるの、とっても自然体で素敵ですね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本: 明治大学の研究所は、データベースを作れたら、今度はそのデータベースが商品になって研究所そのものの活動を維持してくれるようになるとも思っています。それは私がいなくなった後も残るし、そこにこの想いがずっと繋がっていけば良いんじゃないかなと思っています。いつも、高橋さんとお話をすると多くの気づきがあります。今日はどうもありがとうございました。

高橋: こちらこそありがとうございました。結局こちらがいろいろ教えていただくようになってしまいましたね。役得でした！